

住みつづける意志

—紋別市内陸部における畜舎景観の成りたち—

土 田 拓
TSUCHIDA Taku
(COE研究員・RA)

はじめに

小稿は北海道紋別市内陸部^{もんべつ}に点在する農家の畜舎景観に焦点をあてる。「畜舎景観」という用語は、家畜の寝食の場である畜舎そのものに加えて、サイロを始め家畜飼養にかかわる施設全般を対象に、それらの形状や立地、構成といった視角的側面を指す表現として使いたい。畜舎景観の成りたちを検討することにより、人々はいかにそこでの暮らしを立ててきたのか、その断面を窺ってみることが課題である。

I 北海道的村落景観のなかの暮らし

—切り口としての畜舎景観

整然とした地割のなかに家々が点在する村落景観は、北海道の歴史性や地域性を示す景観のひとつである。その地割の多くは、1886年（明治19）に北海道庁によって始められた殖民適地の調査（殖民地選定事業）と、その選定地の区画割後に入植を行わせる土地処分制度（殖民地区画制度・1889年（明治22）より施行）によって形成されている⁽¹⁾。選定地に測設された区画線は直角に交わるように設計されており、ひとつひとつの区画は矩形をなす。標準型では間口100間（約182m）奥行き150間（約273m）の5町歩ほどの広さの土地が一户分とされているが、実際には区画割に際してそれぞれの土地条件も考慮されたため、標準型以外の土地割も見られる。そのような区画毎に農家が入植したことから、家屋は点在し、集落形態は基本的には散居制⁽²⁾となった。

この殖民地区画制度に基づいた地割は、条里制や近世の新田村に見られる地割と類似の性格を持ってい

る。そこに共通して表れる整然性や統一性は、ある時期に計画的に開発が進められたことを示しており、それを可能とした、技術水準・政治形態・社会関係（事業に携わる労働力の調達・維持）はいつの時代にも成立しうるものではなかった。整然とした地割という大事業の跡は、個々人が思い思いに土地を拓いたのでは作られることはないのであり、大事業の遂行を可能とした時代や地域の性格を反映した景観ということになる。

北海道の場合、このような性格をもった地割は、先に触れたように明治以降の北海道拓殖政策の中で主として形成されている⁽³⁾。そのため地域的にみると、近世から開発の始まった北海道南部よりも、明治以降に開発の進んだ内陸部に多く見出され、それは現在も確認することができる。

とはいえ、開発の計画性を直截に示しているその地割景観が型として今日まで引き継がれている状況は、必ずしも開拓以来の年月の平穏さを保障するものではない。より一層の農業適地への入植願望など様々な要因から、移住者やその子等は北海道内部で転住を繰り返すことが多い。転住に伴ってできた離農跡地を別人が継ぐことにより住人の交代も起きた。実際の暮らしは流動性や不安定さを孕んでいたのである。

そのような状況の中で人々はいかに生活してきたのか、その断面を窺おうとしたとき、景観構成要素と生産活動の関係を問う視角が糸口になるだろう。両者の関係を問うことで、それぞれの時代性や地域性を検討することが可能となる。例えば、民家や耕地地割と生業の関係性についての研究がこれまでなされてきた⁽⁴⁾。それらの研究を念頭におきつつ、ここでは畜舎景観に注目したい。北海道の開拓・定住が土地と労力さえあ

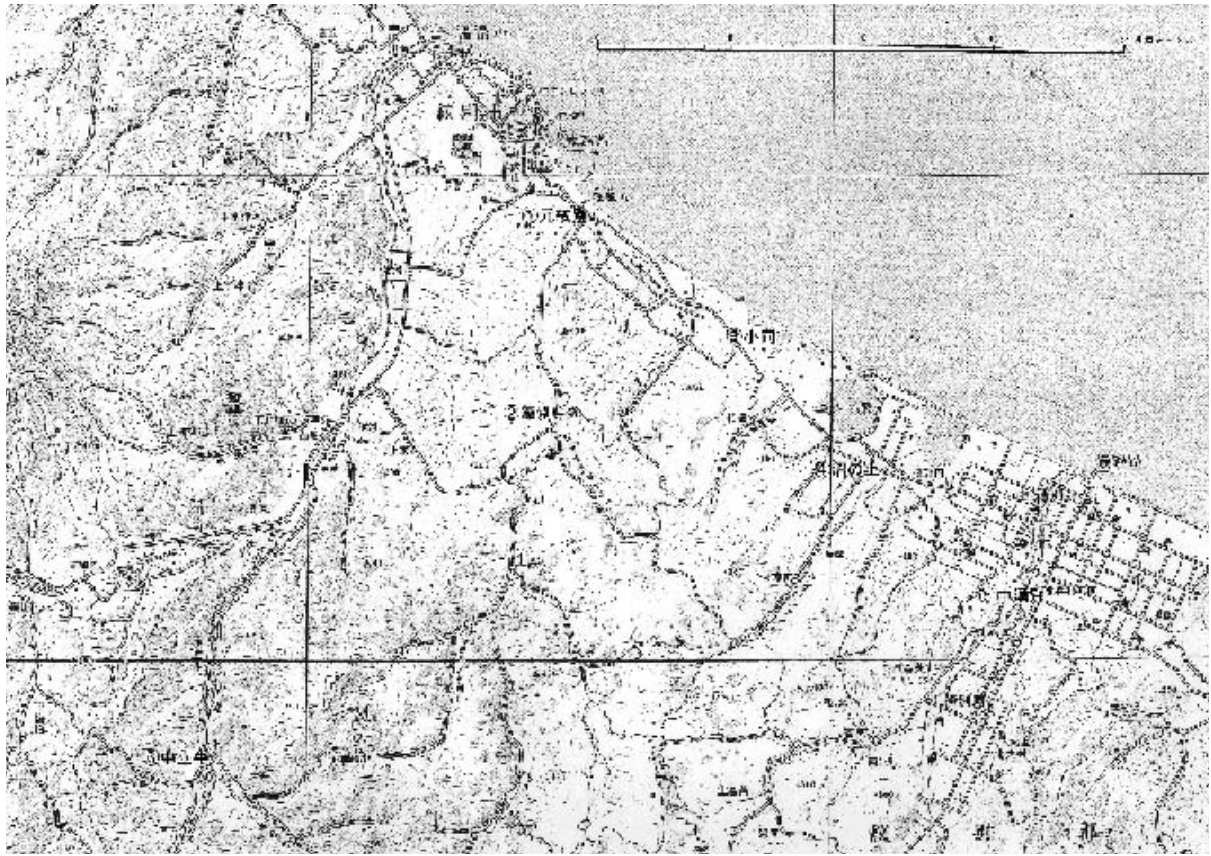


図1 調査地域 (国土地理院発行 1:200,000地勢図「紋別」の一部を加筆修正)

ればいかようにでもなるというのではなく、生産活動を行うためには家畜の存在が必要不可欠であったからである。重要な存在であった家畜の飼養実態の変遷と畜舎景観の関係を検討することにより、北海道で人々はいかに暮らしを立ててきたのか、その断面を窺ってみることが可能であると考えている。

とりわけ、現在酪農地帯となっている北海道北部から東部にかけての一带では、入植以来現在まで一貫して家畜が重要な存在であり続けてきた。そこで、そうした地域の一つである紋別市内陸部(図1)をフィールドとして、小稿は家畜飼養の変遷と畜舎景観の関係をたどってみたい。⁽⁵⁾

II 酪農以前の家畜飼養

紋別市内陸部は殖民地選定区画事業の中で入植者の急激な増加をみた地域であり、その内陸部では現在、乳牛飼養による酪農を生業の軸に据えているところが多い。しかし、それは入植時以来の生業の構造ではなかった。酪農に集約される以前には、換金作物の馬

鈴薯や自家消費用の燕麦、大麦、小麦、裸麦、デントコーン、ビートなどを栽培する一方で、畜産・狩猟・漁撈・採集活動も行い、冬期には冬山造材と呼ぶ林業に携わっている人が多かった。そうした生業複合の構造の中で役畜として馬が、牛乳・卵・獣毛・肉の獲得、およびその販売による現金収入を目的として綿羊・鶏・豚・牛といった家畜が、飼養されていた。このような、酪農に生業が集約される以前の畜産飼養のあり方をこの章では確認する。なお、便宜上、乳牛飼養に生業が集約される以前の時代を「酪農以前」、集約後の時代を「酪農以後」と表記する。

1 馬

開拓農家は馬をまず耕作のための畜力として期待した。土地を拓き農地にしていくことは、北海道に定住する上で前提となる行為であり、その開墾作業のことを紋別市内陸部の地元の人は「アラチ(新地)を拓く」と表現する。その時に一番労力を要するのは立木の処理であった。立木は伐木もしくは倒木後に、開墾地の端に寄せられる。その際、立木にかけたロープを引い

て木を倒す時や、倒木を移動する時に馬の畜力が重要であった。立木を除いた後に火入れ行い地表を覆う笹を焼くと、次に新墾プラオ（プラウ）と呼ぶ犁をかけて土を反転する。しかし、そのまま良質な定畑になるわけではない。笹の根本部分は、新墾プラオをかけることで反転し土中に収まる。その笹を腐らせるために3年間は土を深く起こし砕土することはできなかった。とはいえ、反転した土の境目には蕎麦などを蒔く。蕎麦は養分を吸い取るので笹の根を腐らせるといわれていた。蕎麦の播種後は、馬で砕土用の農具であるハロウ（ハロー）を軽くかけ、深く起こさない程度に土をかぶせてゆく。入植当初は馬を所有していない家もある。そのような場合にはアラチを拓く全ての作業を人力で行うことになるが、古い農家が馬を連れて手伝いに来ることもあった。

定畑の維持においても馬は欠かせないものとなる。耕耘や除草に使う農機具を牽く春の作業と、秋の収穫・脱穀作業に伴う収穫物や農機具の運搬が大きな仕事であった。もちろん、中耕に際して除草機、カルチベータ、ハロウといった農機具も牽く。ここでは、その具体的な場面を割愛せざるをえないが、農具を牽いたり、収穫物や農機具を移動させるために馬の畜力は必要不可欠であった。

運搬の役割が期待されたのは、農作業の場だけではない。農閑期の冬に農家の男は、冬山造材と呼ぶ林業に参加することが多い。担当した作業は、伐木を行うヤマゴ、集材を行うヤブダシ、運材を行うウマオイ（馬追い）、集材や運材のための道の管理を行うミチツケやミチナオシといった人夫、が代表的である。自家から連れてゆく馬は主に運材の場面で活躍することになる。いずれの作業も飯場に泊り込んで行すが、馬追いの場合、近場の時には家から通う人も多い。飯場の畜舎の狭い区画に馬を入れておくと弱るから、馬のことを考えて、あえて家から通うという人もいた。

馬の経済的な役割も見落とすことはできない。岡本保さん（大正11年生まれ・紋別市藻別②）は春先にコッコウマ（仔馬）が生まれると、秋の馬市まで育てて、馬喰に売っている。紋別では馬市は小向（図1③）でしか開かれておらず、山を越えてそこまでいっていた。馬市では、スタイルのいい馬がみな軍用馬に連れてい

かれた時代もあった。種付は毎年5、6月頃に行う。藻別には種馬を連れた人が巡回してきており、保さんのところへは、藻別の農家を一通りまわった後、夕方頃にやってきて、泊まっていった。泊めると種付をサービスしてくれる人もいた。種付料は燕麦で払われることもあった。種付馬がきたときには、種馬は両綱をはり餌を食べられる分だけ体を動かせるようにして馬小屋に入れておく。その間、保さんの馬は屋外にだされた。種馬をもった人は一週間に一度当馬をして、集落内の各農家の馬の発情期を確かめていく。一度の巡回で全ての家の馬に種付するわけではなかった。そのため、種付期間の約一月のあいだ何度も保さんの家に泊まっている。巡回してくるのは専門の業者ではなく、種馬をもっている農家だった。バクロウツケ（馬喰気）のある人がやっていたが、全員がというわけではない。巡回してくる人は何人かいて、各農家がそれぞれの馬の好みで種付する馬を選んでいく。

一戸の開拓農家の馬には、ここまで見てきたように様々な場での貢献が期待される。詳細は報告できなかったが、蓄力のほか、糞尿もまた堆肥となり重要であった。農家における馬の役割が多様であったことは北海道に限らず一般的であったといえる。ただ、紋別市内陸部の場合に注意されるのは、一年を通して均等に馬を必要とする生産活動の場があったことである。春から秋にかけては農機具を牽き、あるいは馬車で人や荷物を運び、秋から冬にかけては収穫物や材木などを運搬した。暮らしを立てる上で、馬は核となる存在だったのである。ある戦後入植の家では、入植してまず最初に飼った家畜は馬だといひ、戦後に分家した別の家では、分家時に本家から馬を1頭分与してもらっている。

2 鶏

鶏は卵の販売により日銭が得られるとともに、肉は蛋白源となった。以下は福原運造さん（昭和9年生まれ・紋別市元紋別①）の体験である。鶏は40羽ほど飼っていて、卵、肉（廃鶏）が目的であった。20羽は産卵前の若鶏で、残りが親鶏であった。卵を産まなくなった廃鶏は、その肉が農家の蛋白源となり、うどんのだしに使われたりしていた。雛は毎年春に30から40羽

買ってくるが、うまく育つのは半分程である。購入した雛の中には、必ず2、3羽の雄鶏が混じっていた。購入したうちの約1割の割合になる。その雄鶏も育て、肉を食用とした。

養鶏はネズミやキツネの被害に遭うこともあったが、日銭がはいるからよい。父親（明治40年生まれ）が炭焼きをやっていて顔見知りが多く、運造さんは、そういう人に一日平均十数個とれる卵を売っていた。顔見知りには紋別や元紋別の浜に住む漁師も多かった。そのため時には、鯨など好きなだけ持っていけと言われることもあり、魚には不自由していなかった。

鶏は家によっては「卵を売ったお金で子供たちを高校まで上げたんだ」と言われるくらい経済的に重要になった。

それに伴って、飼養にも手をかけるようになる。杉山祐吾さん（大正6年生まれ・紋別市沼の上^{ぬまのうえ}④）は、鶏100羽で乳牛2頭分に相当する収入になったという。その鶏の餌は麦の糠、ふすま、野菜屑、でんぷん滓を煮たものが主であったが、毎日卵を生ませようとする⁽⁷⁾と、動物性蛋白質も混ぜる必要があった。そこで、鶏の餌にするために、紋別市街のかまほこ工場から魚のかまほこに使わない部分を安く買ってきていた。夏はガンガン（缶全般を指すが、ここでは一斗缶のこと）に入れて汽車で、冬はバチバチと呼ぶ櫓に積み馬で運んでくる。バチバチ一杯分の魚の滓とでんぷん一袋（25kg）の交換であった。でんぷんは工場のかまほこ作りに使われる。工場が忙しい時には交換を断られることもあるため、それを避けるために行きつけの工場を決め、顔を覚えてもらった。バチバチ一杯積むほどの量の魚滓を持ってくるのは、1月頃寒い時期のことであった。寒い時期でないと滓を多く持ってきても腐らせてしまうからである。運んできた滓は雪上に広げて凍らせた後、小屋に積んでおいた。凍らせることで保存がきく。それでも3月になると臭いがしてくるようになった。沼の上から21kmもある紋別に魚滓をもらいにいくと、冬は一日がかりの仕事になった。9時には紋別へ着くように、早朝家をでる。朝食は紋別でとり、昼前に荷を積み終え、帰宅するのは夜の8時頃になった。馬の餌には野草を切ったものと燕麦を準備した。行きは空荷であるが、帰りは重い。くわえて道

は今と違って起伏が激しい。そのため、帰宅時には馬も疲れきっていたという。

3 綿羊

綿羊はおもに毛の利用を目的に飼養されている。春5月頃に毛を刈り、冬に糸に紡ぎ、衣類を編むことが一般的である。糸紡ぎなどの冬の作業は女性の家仕事となる。岡本保さんとオワさん（ともに大正11年生まれ）は、夫婦2人で鋏を使い、綿羊の毛を刈っていた。岡本さんの家では、人を見ると助走をつけてドンツイテ（突いて）くる気性の荒い雄の羊から一貫目ほどの毛がとれた。この羊は気性の荒さ故に分家のときに馬と一緒に譲られたものだった。春に刈った毛は冬にたらいで洗う。保さんは造材に行っているのも毛洗いはオワさんの仕事となる。綿羊の毛は脂が強く、まず、脂をとるためにアクミズ（灰汁）で洗う。灰汁利用により、必要な粉石鹼量を抑えることができたからである。灰汁はガンガンに入れた灰の混ぜ湯を沈殿させた上水を使っていた。灰汁で洗った後に粉石鹼で洗った。洗った羊毛は、干した後に糸に紡ぐが、そのままの状態だと固まっているので、手でほぐしながら、足踏み紡毛機を使って糸に紡いでいく。慣れないうちは、うまくいかずにだまになることもあった。それをヘビが玉を飲んだようになると言っている。毛糸からは、手袋、靴下、ももひき、子供の産着などなんでも編んだ、とオワさんはいう。丈夫だから破けることはなかった。羊は大抵2頭以上飼っているから交配は自分の家でやっていた。羊の子は尻尾が長い。そこで、板に穴をあけて尻尾を通し、焼いたハサミで断尾を行っている。舎飼いの時間が長いと、尻尾が長いと地面に接触し不衛生になるためである。羊を草原に放すときは、杭に繋ぐ。杭の周りを回れるように、綱は直接杭に結び付けるのではなく、鉄輪に繋ぎ、それを杭に通した。のちに、柴でアラチに柵を作り放すようになった。一反歩ほどの広さである。柵は立木の間に柴を立てることで作っている。立木はそのままを使うのではなく、根をいくらか残して伐木したあとの根本部分を利用した。アラチに綿羊を放すと、踏みこんで柵の根を枯らすという利点もあった。



写真1 酪農以前の馬小屋 (2005.9.29 紋別市元紋別・筆者撮影)

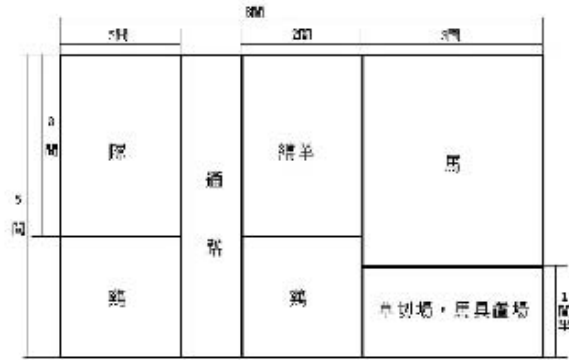


図2 馬小屋 (写真1) の間取り



写真2 屋根材の重なり (2005.9.29 紋別市元紋別・筆者撮影)

写真1の馬小屋は掘立て、地盤沈下のため、建築当初よりもやや沈んでいる。その内部から屋根を写したものが、写真2になる。建築当初の屋根材である桁が見えるが、その破れ目からは上に被せたトタンを確認できる。写真1の馬小屋の間取りを示したものが、図2である。

4 豚

豚は肉の獲得を目的に飼養されることが多い。ほとんど年中舎飼いで、家人の食べものの残り、屑イモ、麦類を餌としていた。春に子豚を買ってきて冬まで育て、年末に肉をとるとというのが一般的である。そのため、種付を自家で行うことは少ない。肉は近隣の家に分配、売られることもあった。捌くときには、首から上が捌いた人の取り分であった。

5 生業複合の一部としての家畜飼養と畜舎景観

筆者の力不足と、紙幅の関係からそれぞれの家畜の報告に粗密があることを弁解しなければならないが、この章では酪農以前の家畜飼養を概観した。家によって具体的な度合いは異なるものの、馬・鶏・綿羊・豚のそれぞれに期待された役割があった。

注意しておきたいのは、それら家畜の飼養が、暮らしをたてるために複合的に営まれた生業要素の一つで

あったことである。生業複合の一部としての家畜飼養には、おのずから飼養規模に限界があった。それは、畜舎のあり方にも反映されている。写真1はそのような畜舎の一つで、1957年（昭和32）に建てられたものである。集落内の共同作業で建てられており、必要な材木は畜舎の持ち主の山から伐り出されている。その作りは簡素で、畜舎そのものの他に付属施設は伴っていない。屋根は最初桁葺きだったが、10年以上たつて桁がいたんできたため、ナメコトタン（波状のトタンのこと）を上から被せている（写真2）。この畜舎は建築時から馬、綿羊、鶏、豚を一緒に飼うことを想定しており、間取りは図2のようになっている。

こうした畜舎はウマゴヤ・マヤと呼ばれた。鶏や綿羊・豚の役割も小さいものではないが、年間を通して活動の場がある馬の重要性はやや突出しており、それが畜舎の名称に象徴的に表れたのだろう。

酪農以前の家畜飼養は、複合的に営んだ生業要素の

ひとつとして複数の家畜を小規模に飼うものであり、それは異種の家畜群をまとめて飼養する簡素な畜舎や、マゴヤ以外に施設を伴わない畜舎景観を特徴としている。

Ⅲ 牛舎の接ぎ－酪農以後の家畜飼養

前章において確認したような家畜飼養の中に少しずつ牛が入ってくる。それとともに家畜の淘汰がおきてくる。淘汰は家畜飼養のみでなく、酪農以前の生業要素全般におきたことだった。畑作を中心とした農作、冬季農閑期の林業、畜産、狩猟・漁猟・採集活動を複合的に営み、それぞれの場で馬を必要とした生業構造が、乳牛を飼育する酪農へ集約されていく過程を、ここでは窺うことができる。酪農に依った生活の構造は現在まで引き継がれていて、今では、生業複合からの転換時の酪農を経験した人々の孫の世代が働き手の中心、主要労働力となりつつある。とはいえ、両者の経験している酪農の差は小さくない。転換時の酪農と農業生産法人として時に百頭以上の牛を飼うこともある現在の酪農では、規模も方法も異なるのである。

現存する酪農家の牛の飼い始めは、貸付牛制度を用いて1頭から始まっていることが多い⁽⁸⁾。それから徐々に増やしていくことになるのだが、それは何十頭もの牛の飼育を念頭においたものではなかった。杉山祐吾さん（大正6年生まれ・紋別市沼の上④）は、初め牛を1,2頭飼っていた頃はたばこ代稼ぎだった、それが小遣い稼ぎになり、生活稼ぎに昇格していった、という。生活稼ぎとなったのは4,5頭飼うようになってからである。2頭、3頭、4頭でお金の重みが違う。最初の頃は、「あそこの家では3頭しぼっている」と聞いて感心していた時代だった。祐吾さんが酪農を始めたのは1953年（昭和28）のことで、その頃付近で一番大きい農家が牛を4頭飼っていた。それを目安として裕吾さんも牛を4頭入れられる牛舎を建てている。

ところが、次第に牛の多頭飼育を要請されるようになってくる。それに伴って、乳牛の飼養の仕方、飼料構成、施設構成、牛乳の出荷回収の方法、搾乳方法といった牛にかかわる生産活動も変化してきた。

写真3はそのような歩みをよく反映した畜舎景観の



写真3 現前の畜舎景観（2005.7.18 紋別市沼の上・筆者撮影）

一つになる。写真にある姿は建築当初以来の姿ではない。ここでは、写真3に写る牛舎や付属施設が現前の姿に至る足跡をたどることを軸に、乳牛飼養の変化と畜舎景観の関係について検討する。

1 少数飼育の時代

写真3に写っているのは柏倉弘さん（昭和6年生まれ・沼の上共進④）の牛舎と付属施設である。もとは3-1（以下写真3中の数字は枝番で表記する。）の煉瓦造りの部分しかなかった。それ以外の部分は後に加わったものである。一番古い3-1の部分は1952年（昭和27）に牛専用の牛舎として建てられている。山から木を伐りだしてきたり、煉瓦を積んだり、できることは全て自分たちで行い、近隣3軒のテマガイ（手間替）によって建てた牛舎である。請負で建てたのではなかった。「ただね、小規模だからできたんであって」と弘さんはいう。その当時はまだコンクリートブロックや火山灰ブロックはなかった。コンクリートブロックは重く、仕事がかどらなかつた。火山灰ブロックは軽く、安いから後に普及している。それに対し煉瓦は昔からあったが、価格は高かった。煉瓦は火山灰ブロックよりも丈夫である。中湧別（図1⑤）にワタナベ煉瓦工場ができる前は、江別（北海道中央部、札幌近郊の町）から取り寄せないと手に入らないものだった。

その3-1の牛舎では牛を5頭飼うことができた。当時はまだ乳搾りは手搾りであった。以下はそのような少数飼育の頃の牛飼いに関する杉山祐吾さん（大正

6年生まれ)の体験である。手絞りの頃は、バケツに絞って、それを牛乳缶にあげていた。牛が1,2頭のうちは、牛乳缶を出荷まで川や井戸で冷やしていた。4頭ほどになると、水槽を準備し、そこで牛乳缶を冷やすようになった。水槽に入れる水は手押しポンプで汲み上げていた。水槽の水が温くなる度に何度も水を交換するため大変だった。牛乳は絞ってすぐに冷やさないと品質が落ちる。2等乳になると価格がぐんと落ちるので冷やす作業には気を配った。

毎朝集荷される牛乳は、前の晩に搾った分とその日の朝に搾った分をだすのが普通である。牛乳の出荷時、最初は牛乳缶をリヤカーや自転車に積み集乳所まで運んでいた。集乳場で中身を空けると缶だけ持ち帰ってきた。そのうち、家の前の道路沿いに設置された台の上に缶を置いておくと、企業が回収してくれるようになった。その場合、回収された缶は、次の日の牛乳の出荷時に戻ってきた。そのため、回収になってからは従来の2倍の数の缶が必要となった。祐吾さんの家では、10本ほど準備している。牛の乳は、よく出る時には1頭の牛で缶1本分だ。牛乳缶1本に1斗5升、30kgほど入る。

この頃は飼育方法も素朴であった。1,2頭飼っていた時は、牛を1頭ずつ杭に繋いで放す場合が多い。それが、後に述べるような多頭化の中で、放牧されるようになってゆく。また、飼料はこの頃、カンソウが中心であった。カンソウとは乾燥牧草のことである。最もはじめのカンソウの作り方は、鎌を持った人が横一列に並んで牧草を刈っていき、刈った牧草の攪拌と寄せをフォークにより行う方法である。これらの作業は後にモアやレーキといった農機具が登場することで馬に頼れるようになってゆく。さらにその後、立方体に牧草を梱包するコンパクトや現行のロール状にする方法が登場してくる。コンパクトの登場する以前、カンソウは牛舎の2階に入れたり、畑や牛舎近くに立てられた棒に巻きつけるように寄せて置かれていた。後者をニオやヘチマと称している。冬に畑のニオからカンソウを運ぶにはバチバチを馬に牽かせることになった。

牛を飼う上で、蹄の状態は乳量に影響するため、削蹄も重要である。杉山祐吾さん(大正6年生まれ)は、

削蹄を年に1度は鋏を用いて自分で行っている。削蹄には木製で矩形の木枠の四隅に足がついたものを使う。牛が1頭ほど入るほどの大きさのものである。枠の中に牛を入れ、蹄を切る足とは反対の足を地面から浮かせて枠に縛る。すると削蹄を行う足に重心がかかり動かない。その状態で鉋や鋏で蹄を切った。裏を削る時は、削る足を浮かせて枠に縛る。後に削蹄師が枠を持ってやってくるようになった。

以上、確認してきたような牛の導入当初からの少数飼育の時代の牛の飼い方に対して、飼養乳牛の多頭化の中で、様々な配慮がなされていく。それは畜舎景観に跡を残した。

2 多頭飼育の時代

牛舎の接ぎ 多頭化への対応や配慮がもっともよく現れるのは牛舎である。多頭飼育を可能とする大型の牛舎が新たに必要とされるが、その場合それまでの牛舎に新牛舎を接ぐ形で大型化に対応する例がしばしば見られる。写真3-2の部分は多頭化が進みつつある時、1962年(昭和37)頃に3-1の煉瓦製牛舎に接がれる形で建てられている。この牛舎もテマガイで対応できる部分、例えば基礎などは、自分たちで作っている。建材には火山灰ブロックが使われた。同じ火山灰ブロックでも工場によって質は異なってくる。写真4は写真3-5部分を拡大したものである。写真3では切れてしまっているが、左側にサイロがもう一基ある。そのサイロと牛舎を繋ぐ建物と、牛舎の間の接ぎが写真4には写っている。写真中、右側のブロックが湧別の耕農土管という工場で作ってもらったものである。この会社は暗渠土管を主に作っていたところである。一方左側、サイロと牛舎を繋ぐ建物のブロックはヤマモトブロックから買ったものである。どちらもほぼ同じ時期のものであるが、違いが現れている。

牛舎を接ぐ時には、旧煉瓦牛舎の内部にも一部手を加えている。新牛舎と接する部分にあった牛乳処理室の地面を、新しい牛舎の高さに合わせている(新しい牛舎のほうが高くなっている)。牛乳処理室は、水槽に水を張り、牛乳缶を沈め冷やしていた場所である。新しい牛舎になってからはバルククーラー(冷却装置)が導入され、牛乳缶により出荷することがなくなった。

それに伴って手加えられたのであった。

これまで見てきた写真3の柏倉弘さんの牛舎は、大ききこそ違えど、煉瓦部分(3-1)もブロック部分(3-2)も同じ形をしている。調査地ではブンカ屋根と呼ばれているものだ。これは、一般的には腰折屋根、マンサード切妻屋根とされているものである(小寺 1969:195; 杉山 1969:245)。弘さんが最初に建てた牛舎がブンカ屋根であったことからわかるように、ブンカ屋根の牛舎は少数飼育の時代から見られたものであった。このブンカ屋根は2階にものを多く入れられるという利便性があるが欠点もあって、雪が多いとつぶれてしまう、と小幡昭一さん(昭和4年生まれ・紋別中立牛^{なかつうし}⑥)はいう。また、ブンカ屋根の牛舎の2階にカンソウを入れておくと、牛の糞尿の蒸気が上にあがりカンソウに匂いがつき、それを牛が嫌がることもあった。2階への草のあげおろしも大変であった。そのため、牛舎と飼料の保管場所が分離し、切妻平屋の牛舎(写真6)やD型ハウス(写真8)が昭和40年代に登場してくることになる。とはいえ、新たな形の建物が登場したからといって、一度に古い形が消滅するわけではないので、ブンカ屋根の牛舎、切妻平屋の牛舎、D型ハウスが混在する状況が生まれることになる。その中で形作られてきた牛舎の接ぎには、いくつかの型を見いだすことが可能である。それは、各家の意向や改良を行った時期を反映している。まず同型の牛舎を棟の方向に延長したタイプがある(写真5)。弘さんの牛舎の接ぎ(写真3-1,2)もこの型で、弘さんの場合ブンカ屋根全盛の時代に接ぎが形成されたことになるから、牛舎の改良は比較的早くに行われたことになる。比較的早くというのは、ブンカ屋根よりも遅く登場した平屋の牛舎やD型ハウスがブンカ屋根に接がれている場合(写真6~8)もあることから、そうした牛舎に比べて相対的な傾向としてはということである。その写真6~8の異なる形の牛舎が接がれている場合をまた一つの型として設定できる。このような接ぎが何度も重ねられていくことで、写真9のように同形の接ぎと異形の接ぎが混在する型もでてくる。以上のように牛舎の形状から接ぎの型を探っていくと大きく3つに分けられるだろう。

一方、接ぎの方向に注意してみると、棟をそのまま



写真4 写真3-5白枠で囲んだ部分を拡大したもの。モノクロだとわかりにくいですが、色質に違いがある。積みの技量の違いから、作業を行った人が異なっていたこともわかる。

(2005.7.18 紋別市沼の上・筆者撮影)

延長する方向に、新しい牛舎を継ぎ足す場合が多い。今まで紹介してきた写真は全てそうになっている。これは、元になるブンカ屋根の牛舎の内部構造によるのだろう。ブンカ屋根の牛舎の一階では、棟の真下に当たる部分に、棟と平行な通路が部屋を二分するように貫通している。その通路の左右に通路向きに牛は並ぶ。そのため、牛舎を接ぐ際も、牛舎内部の通路が折れ曲がることのないよう、延長方向に接ぐのが自然であったといえる。もっとも全てがそうになっているわけではなく、写真10,11のように棟に直角な位置に接がれた場合も存在する。

また、接ぎを挟む建材の比較にも型がでてくるだろう。そこからは、形状に注目したときと同様に、接ぎがなされた時期を窺うことができる。板や煉瓦のほうが火山灰ブロックなどよりも一般的には古い。ただ、建材の選択には各家の経済性も影響を与えること、リフォームのように外から見える部分が必ずしも建築当初以来のものとは限らないこと、などに注意を要する。

形状、接ぎの方向、材質といった基準の設定によって、牛舎の接ぎについて細かに類型化していくことが可能であるが、分類自体を目的とした類型化は生産的な作業とはいえない。ここでは、どの時期に、どのくらいの規模で、どのような牛舎を接ぐか、という多頭化への農家の対応や配慮の違いが牛舎の接ぎにいくつかの型を与えていることを指摘するにとどめたい。

付属施設 牛舎の接ぎに関する報告の中で、写真をい



写真5 写真3と同じく同形を接ぐ事例。
(2005. 5. 16 興部町北興・筆者撮影)



写真6 写真中央, プンカ屋根(奥側)に平屋の牛舎(手前)が接がれる。
(2005. 7. 13 興部町秋里・筆者撮影)



写真7 右側のプンカ屋根の牛舎に接ぎが行われる。規模の違いが対照的。
(2005. 7. 12 興部町豊野・筆者撮影)



写真8 かまぼこ状の建物がD型ハウス。平屋の牛舎に接がれている。
(2005. 7. 12 興部町豊野・筆者撮影)



写真9 プンカ屋根同士の接ぎ(左方)と, 平屋の牛舎との接ぎ(右方)の両方を確認できる。
(2005. 7. 13 興部町秋里・筆者撮影)



写真10 棟と垂直方向に接がれた事例。
(2005. 7. 13 興部町秋里・筆者撮影)



写真11 写真中央部，D型ハウスと平屋の牛舎が垂直に接がれている。
(2005.7.13 興部町秋里・筆者撮影)



写真12 写真3のサイロを別角度から写したもの。写真中の番号は写真3中の番号を示す。
(2005.7.18 紋別市沼の上・筆者撮影)



写真13 白く写るコンクリートの壁に挟まれる形で3基連続して設置されているものがバンカー。
(2005.9.29 紋別市藻別・筆者撮影)

くつか紹介してきた。それらを目にしたとき，そこにあることが当たり前で，何の違和感を感じないものにサイロや配合飼料のタンクがある。サイロは発酵飼料であるサイレージを作るための建物である。牛の飼い始めにはカンソウを主に与えており，発酵飼料を作るサイロは最初の牛舎建築当初からの所与のものではない。

写真3-3,4がサイロである。3-4のサイロは写真3では陰になっていて先端部分しか見えないが，煉瓦製で3-3より小振りである(写真12)。また，写真左側，規模拡大後の牛舎の左側から建物が延長されている先にもサイロがある。

これらのサイロに主に詰め込まれたのはデントコーンと，チモシー・クローバー・オオチャウドといった牧草である。柏倉弘さん(昭和6年生まれ)は，デントコーンは秋に1回，牧草は年に2回刈っていた。サイレージは，作っている最中に雑菌が入って傷んでしまうこともある。そのため，サイロにデントコーンや牧草を積み込んだ後には，できるだけ雑菌が入らないように余計な空気を抜く必要があった。詰め込んだ牧草の上を足で踏み込んだり，春に一番草をサイロに入れシートを被せた上には，水を入れて蓋をするなどして密閉を試みた。それでも詰め込んだ牧草の最上部の一部は雑菌で傷んだ。そこで，二番草を上継ぎ足すときには，まず一番草の傷んでいる部分をきれいに除いた。傷んでいるものと普通のサイレージは，匂い・カビの有無・色合いから見分けることができる。サイロに詰め込んだ牧草やデントコーンのうち最も傷みやすいのは，既述のように，空気に触れやすい最上部となる。他に，真っ直ぐにサイロを建てたつもりが実際には曲がっていた場合，隙間ができ，そこから傷んだりもする。また，普通は傷まないところに雑菌が入ってきて，一度発酵したものが2次発酵をおこしてしまうこともあった。これが一番困った，という。

現在は塔型サイロはそれほど使われていない。飼料を切り込みして収納するために独自の機械が必要であり，作業能率・コストがよくないからである。そのため今は，簡素な作りによりコストを低く抑えられるバンカーサイロ(写真13)が多くなっている。バンカーでは凹型のコンクリートの土台の上に牧草を堆積し，

重機で踏みつける。その上をシートで覆い、自動車の廃タイヤを重しに載せている。

サイロは、サイレージの重視という飼料構成の変化の中で畜舎景観に加わった要素であり、多頭化にともなって塔型サイロは大型化され、複数設置されていった。そして現在は塔型サイロの他、バンカーが畜舎景観に加わっているのである。

サイロに加えて、後付けの付属施設に配合飼料のタンクがあった(写真14)。タンクには業者が配合飼料を入れていく。コーンの粉末や雑穀、ミネラルを含んだ配合飼料を牛に与えると、乳がよく出るようになる。杉山祐吾さん(大正6年生まれ)は、配合飼料は昔からあったが、最初は20kgの袋に入っていたという。少し経営の大きい家は何十袋と買っていた。1955年(昭和30)頃からタンクが見られるようになっている。配合飼料は、農協などを通して、あるいは個人契約で入手していた。農協を経由した場合は手数料がかかるので、経営規模の大きな農家は個人取引で入手するのだという。数%の手数料も取引全体の額が大きいと軽視できないためである。

畜舎周辺 多頭飼育化に伴って、牧草地の有様も変わってくる。杭に繋ぐ方法から、放牧へと変わっていった。牛の飼い方は、土地の面積や家の労働力に応じて変わってくるが、杉山祐吾さん(大正6年生まれ)の家では、夏の放牧には、全牧草地の3分の1の面積が必要であった。カンソウのための牧草地も必要であるため、全ての牧草地に放牧するわけではなかったのである。放牧するようになったのは、牛の数が増えてくると杭に繋いでおく方法では手がかかるためであった。放牧した区画は一区画5反歩ほどである。一区画は1週間にわたって使うが、一度に区画内全体に牛を放すと、いいところの草だけ食べてしまう。そこで区画内を横断するように線を1本張り、1日の放牧範囲を区切った。最初は1日分の広さの所に線をはる。次の日はその線を未放牧地の方へ1日分ずらす。そのため、2日目の牛の放牧スペースは2日分の広さを持った放牧地となる。このように区画内の未放牧地を少しずつ放牧地にしていくため、日を追うごとに放牧面積は広がる。線は大きく弛まないように、ハンマーで7,8m間隔に打った杭により支える。杭には最初、



写真14 写真右端に写っているものが飼料タンク。

(2005.7.12 興部町豊野・筆者撮影)

木の強くて太い棒を使っていた。ひとつの区画を使い切ると次の区画へ移る。祐吾さんは区画を4つほど準備していた。ひとまわりすると、また最初の区画に放す。一度放してから20日ほどで、再放牧が可能となるだけの草が伸びるという。牧草地は2,3年もすると、雑草が増えてくる。その時は、牧草の種を新たに蒔いて手入れをしなければならなかった。このような放牧は昭和60年代までよく見られた。昭和60年代には、牛舎でほぼ一年中舎飼いにする農家もでてきている。

3 定住の象徴

この章の目的は写真3に写る牛舎と付属施設が現前の姿に至る足跡をたどることを軸に、乳牛飼養の変化、及びそれと畜舎景観の関係について検討することにある。ここまでの報告から、写真3の牛舎と付属施設の現前の姿は、少数飼育から多数飼育への枠組みの変化、その内部での乳牛の飼養の仕方、飼料構成、牛舎構成、牛乳の出荷回収の方法の変化に対する農家の対応や配慮の積み重ねの結果であったことが理解できる。

現在の畜舎景観に現れているその跡は、酪農へ生業を集約させ、この地へ住み続けることを選択した人々の意志の象徴でもある。開拓以来の全ての農家が畜舎景観に跡を残せたわけではないからである。

未墾地を拓ききった後も継続された多頭化の中で、所有放牧地の広狭の関係から農家は、離農するか、留まるかの決断を迫られることになった。離農には、多

頭飼育に必要な水の確保、後継者の有無といったように様々な事情が絡んでくる。中には、酪農家として多頭化していく意志があったにもかかわらず、放牧地を拡大する機会にうまく巡り合えずに離農していった者もいるだろう。未墾地を拓くことに加えて、複数の要因から発生した離農跡地を継ぐことで、定住の意志を持つ農家は多頭化に必要な放牧地を確保することができた⁽¹⁰⁾。

そのような離農と定住のはざまにあって、住み続けることを選択した農家が、結果的には牛舎の接ぎをはじめとした跡を残しながら、現在にまで至っているのである。

IV 馬小屋の中の牛、牛舎の中の馬

ここまでの2章において、家畜飼養と畜舎景観の関係を、酪農以前と以後個別にみてきた。それを踏まえて次に、生業複合から酪農へ集約していく時の変化と畜舎景観の関係を探してみたい。

既述のように酪農以前の畜舎は、馬・鶏・綿羊などを一緒に飼養するものであった。そこに徐々に牛が入ってくるが、1,2頭のうちは入植以来の家畜飼養のあり方を踏襲するものであった。柏倉弘さん（昭和6年生まれ・沼の上共進④）は、馬を入れているところをなおして、牛をいれていたという。酪農への集約化の過程にあって、牛は当初ウマヤの中の存在であった。

それが牛の頭数の増加とともに逆転現象が生じてくる。牛舎は基本的には牛のみのために建てられた畜舎であり、他の家畜を考慮していない。それは、それまでの異種の家畜を一緒に飼養してきたウマゴヤ、マゴヤとは性格のことなる畜舎であった。その牛舎の中で馬が飼われるようになるのである。弘さんは1952年（昭和27）に牛を5頭飼うことのできる煉瓦の牛舎を建てている（写真3-1）。その中に馬のための一角が準備された。乳牛の多頭化にあって、馬の飼育をやめなかったのは、当時はまだ、馬を必要とする場があったからである。酪農に比重を移した後も、しばらくは農作を平行して行っていたのであり、そうした畑で馬が必要だった。また、酪農のために畑を牧草地に変えてからも、牧草の刈り取り・運搬などに馬は必要で



写真15 牛舎内部。左側が馬の区画。壁を挟んで右奥に牛の区画が続く。（2005.7.18 紋別市沼の上・筆者撮影）

あった。したがって馬は、畑ではトラクターの入ってくるまで、牧草地でも牧草の刈り取り・乾燥・梱包が機械化されるまで役割を果たしていた。1965年（昭和40）頃まではそうした形で馬が残っている。そのため、牛舎の中に馬という異質な存在の跡が残ることになったのである（写真15）。このように、役割の上で馬の価値が、酪農の始まりにともなって急激に低下したわけではないけれども、次第に牛の頭数が増えていく状況にあって、畜舎の中では脇役になっていかざるをえなかった。生業複合から酪農への集約化の中における家畜の立場の変化は馬小屋の中の牛飼養の跡、牛舎の中の馬飼養の跡という形で畜舎に反映されている。

家畜飼養の変化は目に付きにくい形で、現前の畜舎景観にも反映されている。第II章で示したような酪農以前の馬小屋（写真1）が現前の畜舎景観の中に存在する場合は思いのほか少ない。一部の家で納屋のような形で残されているぐらいである。これは、酪農への集約化に対して、人々が従来の畜舎（ウマゴヤ、マゴヤ）を改良することで対応するのではなく、新たな畜舎（牛舎）を建てることにより対応したことに起因しているだろう。牛舎の接ぎのように分かりやすくはないけれども、現前の畜舎景観の中に馬小屋が存在しないという状況もまた、家畜飼養の変化とそれに対する農家の対応を反映したひとつの跡といえる。これと似たような状況が、目の前で起きている。

酪農の規模拡大は現在も継続中の現象である。百頭以上の規模で牛を飼育する農業生産法人も出てきた。

その場合、もはや「牛舎の接ぎ」で多頭化に対応することはできず、より大規模な施設を新たに用意することになる。

今また、畜舎景観が大きく変わろうとしている。

おわりに

小稿は、紋別市内陸部における農家の暮らしの、大枠での村落景観に現れにくい部分を、家畜飼養の変遷、及びそれと畜舎景観の関係を探ることから窺ってみた。家畜と畜舎景観に注目したのは、それらが生活する上で重要な存在であったからである。

まず第Ⅱ章で酪農に集約される以前の家畜飼養のあり方を検討した。酪農集約以前の家畜飼養は、複合的に営んだ生業要素のひとつとして異種の家畜を複数、小規模に飼うものであり、それは家畜群をまとめて飼養する簡素な畜舎や、マゴヤ以外の施設を伴わない畜舎景観を特徴としていた。

次章では、酪農集約後の乳牛飼養の変遷と畜舎景観の関係を検討した。酪農に集約された生業構造は現在までその基盤を保っている。しかし、酪農のあり方にも変化があり、時代時代の人々の対応や配慮が牛舎の接ぎ、付属施設の設置といった跡を畜舎景観に残すこととなった。その跡は、多頭化の進展の中で入植地に残るか、離農転出するかの岐路に農家がたった時に、住み続けることを選択した意志の表れでもあった。

ここまでの章で行った、酪農以前と以後、それぞれにおける家畜飼養のあり方と畜舎景観の関係の検討をふまえて、第Ⅳ章では酪農以前から以後への変化と畜舎景観の关系到注目した。まず第一に、馬小屋の中の牛飼養の跡・牛舎の中の馬飼養の跡に、第二に現前の畜舎景観に馬小屋がほとんど残っていないという状況に、酪農以前から以後への変化が畜舎景観へ反映される様相を確認した。

紋別市内陸部の農家は、開拓・定住し、世代を越えてその地に住み続けるなかで、時代時代に応じて暮らしを立てるための多数の選択や判断、対応を行ってきた。そうした、住み続ける意志の表れとしての配慮を積み重ねてきた歩みの一部を、小稿では家畜飼養と畜舎景観の成りたちに垣間見たのであった。

注

- (1) 殖民地の選定と区画割の基準は時代・地域によって一様ではない。これらの事業の経過に関しては、これまでに何度か編纂されてきた『北海道史』に詳しい（北海道庁 1937：123-166；北海道 1973：247-262など）。また、その特性や性格については、金田章裕による研究がある（金田 2002）。
 - (2) 集落形態に関しては、拓殖を進めていく中で、農業経営上の便宜を説く散居制と社会生活上の便宜を説く密居制の間で議論が行われてきたことにも留意する必要がある（北海道 1973：1095-1098）。実際に一部では密居制も計画されている。そこでは殖民地地区画測設の際に、居住区と耕地を分けている。この場合、入植者は居住区と別に、周辺に耕地を選定分配された。こうした拓殖計画のことを平井松午は「密居住宅」プランと呼んでいる（平井 1983）。一部は市街地区画に先行するものとなったが、「密居住宅」プランは、実現を見なかったものも多い（平井 1983）。そのため、殖民地選定区画事業が基本的には、整然と地割された耕地景観と家屋の点在する集落景観の両方の成立に大きな影響を与えたと考えて問題ないだろう。
 - (3) 殖民地選定区画事業以前にも一部の土族移住村で区画割が行われている（北海道庁 1937：140-141）。
 - (4) 例えば民家研究の場合、養蚕の盛衰による家屋の変化を分析するといったように、経済・社会構造と民家のかかわりが論じられている。杉本尚次はこの方面の研究をその数の多さから戦後の一特色とみている（杉本 1969：22-26）。また、須藤護は1960年代後半からの動向としてデザインサーベイをとりあげ、そこでは「自然環境に対して、また生業との関係において、人々はどのように対応し、どのような配慮を環境に、集落に、そして民家に働きかけてきたか、それが形態としてどのような形で現れているか」（須藤 2002：237）ということが主なテーマとなったことを指摘している。
- 一方、耕地地割では水田に関する研究を典型としてあげられる。一例をあげれば、おそらく中世につながる耕地景観として谷筋の谷田が目されている（木村 1996：114-116；古島 1967：104-118）。その谷田に香月洋一郎は、谷筋に依った人々の開墾定住様式を見出し、ひとつの谷川筋の水路にあぜ越し田が多いところと小水路が発達しているところのあることを水路図を作成することで抽出し、そこに耕地の拓かれた時期の違いを見ている（香月 1984；2000）。
- (5) 小稿では、紋別市内陸部のむらを取り上げるが、写真については、紋別市に隣接する興部町の事例もあげる。
 - (6) 伝承者の方々の集落名の後ろの数字は図1上の数字と対応する。なお、各章内に複数回登場する場合、2度目以降は集落名を省略した。
 - (7) 農家にとって主要な換金作物であった馬鈴薯はでんぷんに加工し出荷された。以下とくに断りなく「でんぷん」といった場合、各農家が自家で作付けた馬鈴薯より作ったで

んぶんのことを指す。

- (8) 戦後の北海道の酪農振興政策における乳牛導入事業の最も早いものは、1950年度（昭和25）から開始された道有雌牛貸付事業である。それは、「道が牝牛を市町村・農協に貸付け、市町村・農協が無牛農家に対し飼養管理を委託する形式をとり、借受者は五年以内に生まれた牝犢を返納すれば、無償で貸付牛の払下げをうけられるしくみ」（農政史研究会 1976：220）であった。道有貸付牛のみでは量的に限られるため、それを補うために多くの市町村・農協が独自に乳牛導入事業を実施している（農政史研究会 1976：220）。
- (9) 戦後における北海道酪農の展開構造は規模拡大と専門化を特徴としている。その要因のひとつとして、行政の関与による政策的要因が指摘されている。北倉公彦は、北海道酪農の規模拡大・専門化と政策の関係を扱った研究の動向を整理した上で、「多種多様な酪農生産に直接関わる助成策を包括的にとらえるため、政策誘導策として公的資金を投入して行われる施策を包括して酪農関係の「公的投資」と総称」（北倉 2000：19）し、公的投資が酪農構造を変革する要因について検証している。北海道の生活文化を理解する上でも、政策的側面との関連性は重要な検討課題であるが、さしあたって小稿では農家の生産活動の具体的な営みに焦点をあてているため、政策的側面との関連性について掘り下げた検討は行わない。
- (10) 牧草地をめぐる状況はその後変化し、過疎化にともない荒れる農地もでてきた。その状況も牛を時に百頭以上の規模で飼養する農業生産法人の出現により、現在変わりつつある。柏倉弘さん（昭和6年生まれ・沼の上共進）は「最近では農業生産法人のおかげで遊休農地ができないのでよい。しかも奥にも後継者が育っている。おれの土地も誰も使わなくなるのではないかと思っていたが、そういうわけで大丈夫だったのでよかった。これでもまだ、土地が足りないと生産法人ではいっている。過疎で農家はなくなると思っていたが、そうはならなかった」という。

参考文献

古島敏雄

1967『土地に刻まれた歴史』 東京：岩波書店。

平井松午

1983「殖民地地区画における「密居宅地」プランー北海道西部の場合ー」『徳島大学教養部紀要（人文・社会科学）』第18巻 徳島大学教養部。

北海道

1973『新北海道史』第4巻 通説3 北海道：北海道。

北海道庁

1937『新選北海道史』第4巻 通説3 北海道：北海道庁。

金田章裕

2002「北海道殖民地地区画の特性と系譜」『歴史地理学』44-1 歴史地理学会。

香月洋一郎

1984「定住ー農耕生産領域の形成と発展」『漂泊と定住ー定住社会への道ー』（日本民俗文化大系 第6巻） 東京：小学館。

2000『景観のなかの暮らしー生産領域の民俗[改訂新版]』 東京：未来社。

木村 礎

1996「なぜ歩くのかーフィールドワークと歴史学ー」『村の世界 村の景観』（木村礎著作集7） 東京：名著出版（初出は『歴史評論』433 1986年）。

北倉公彦

2000『北海道酪農の発展と公的投資』 東京：筑波書房。農政史研究会

1976『戦後北海道農政史』 東京：農山漁村文化協会。

小寺平吉

1969『北海道の民家』 東京：明玄書房。

須藤 護

2002「建造物と諸施設ー民家を中心にしてー」『民具と民俗』（講座日本の民俗学9） 東京：雄山閣。

杉本尚次

1969『日本民家の研究』 京都：ミネルヴァ書房。

[2005年12月9日受理，12月26日審査終了]